

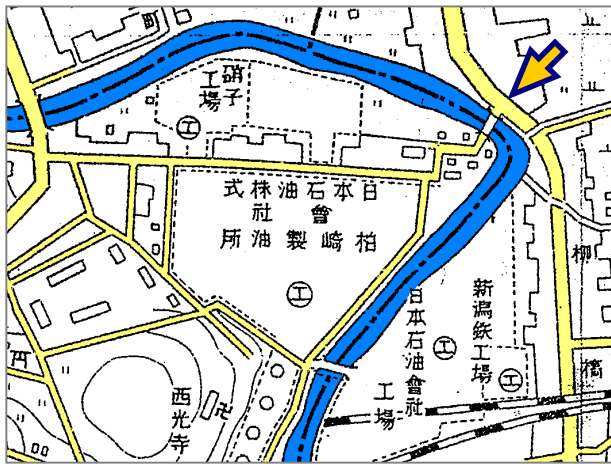
「柏崎の橋」

10 新橋

昭和57年に鶴川激特工事の掘削が開始されてから今年で30年。工事により、旧鶴川の川筋が道路に変わると同時に、橋としての役割を終えたのが「新橋」である。

江戸時代、上条郷（鶴川沿いの村々）の年貢米は鶴川を使って船で運ばれた。柏崎文庫に「寛政年中、大久保村地内あら町に 上条郷十六ヶ村の御倉建設し、年貢米運搬上、新たに橋を鶴川に架せしを以て新橋という。」と記されているように、年貢米を蔵に運ぶために作られたのが新橋と言われている。

蔵は西光寺の下、帝石の寮があった場所に建っていて、大久保御蔵や端場御蔵などと呼ばれたという。西光寺近くにはかつて御蔵小路という通りもあったが、激特工事で姿を消している。



「柏崎町及附近之図」の新橋・大久保部分
（「柏崎文庫」11巻より）

大正4年から10年頃の図と思われる。濃く塗りつぶしたのが旧鶴川。矢印の先が新橋。激特工事開始直前の位置より川下に架けられているのがわかる。



新橋 昭和39年以前か？
（真貝新一氏寄贈写真より）

新橋のたもとは「アド場」（川岸の洗い場）があった。ここは、洗濯をしたり、野菜を洗ったり、味噌・漬物の桶を洗ったりと柳橋の人々の生活に欠かせない場所であったが、昭和15年ごろから工場等が立地するようになり、次第に使われなくなった。また、市内上条出身の漢学教師で、内藤久寛を教え子に持つ大島氷堂が、百姓一揆が旧陣屋の柏崎県庁に押し寄せるといふ知らせを聞き、一揆の群集を説得するため新橋の上でたったひとり待っていた、という明治時代の話も残っている。

昭和41年に「新橋」という新町名の由来になったこの橋は、鶴川の氾濫のたび水没・流失し、幾度となく架け替えられ、ついには激特工事によりなくなった。しかし昭和63年3月、かつて存在した場所に新しい「新橋」が竣工、赤い欄干のみの姿ではあるが、その名前を後世に残している。

●参考にした本

- ・新橋（柳橋2区）の歩み（224 ヤナ）
- ・柳橋今昔物語（224 ヤナ）
- ・わたしたちのまち大洲（224 ワタ）
- ・柏崎のいしづみ（224 ヤマ）山田良平著
- ・柏崎の民俗と余録（382 ヤマ）山田良平著